

2 若年層における薬物乱用の実態と予防・対策

(1) 実態

ア 再非行・再犯の現状

平成 23 年版犯罪白書においては、「少年・若年犯罪者の実態と再犯防止」と題し、各種の統計資料、少年院出院者の犯罪に関する追跡調査（特別調査 1）、非行少年及び若年犯罪者の意識調査（特別調査 2）、更生事例の分析等を通じ、少年及び若年者の犯罪の実態を明らかにし、その再犯の要因、改善更生の契機等を考察している。

○特別調査 1（少年院出院者の犯罪に関する追跡調査）

【対象者】 平成 16 年 1 月から 3 月の間に全国の少年院を出院した出院時 18、19 歳の者 644 人

性別……男 606 人（94.1%）、女 38 人（5.9%）

年齢別…… 18 歳 342 人（53.1%）、19 歳 302 人（46.9%）

【調査内容】 対象者が少年院を出院後に行った犯行（25 歳に至るまでに罰金以上の刑事処分（道交違反の罪のみによる罰金刑を除く）が確定したものに限り）の有無及びその状況の調査

○特別調査 2（非行少年・若年犯罪者の意識調査）

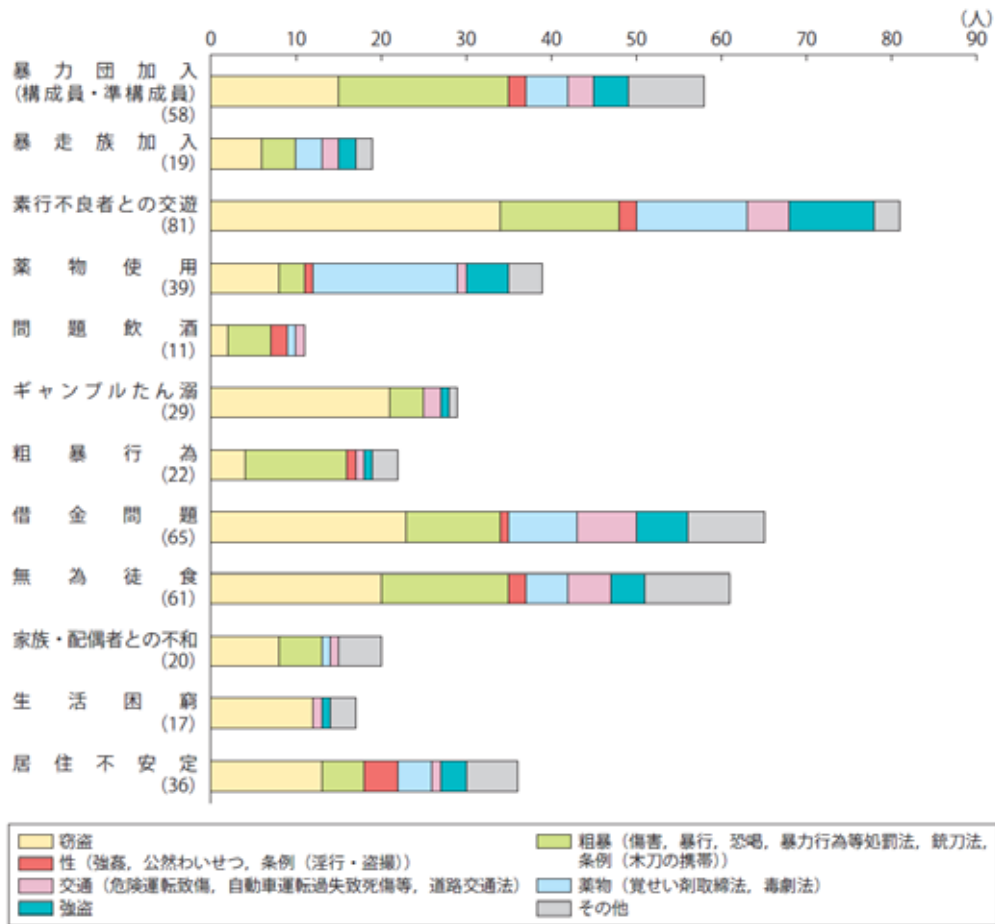
【対象者】 平成 23 年 3 月に少年鑑別所に観護措置により入所した少年（730 人）及び同時期に刑事施設に収容されていた刑執行開始後間もない年齢 30 歳未満の受刑者（372 人）

【調査方法】 少年鑑別所及び刑事施設に生活意識、非行や犯罪の原因や改善更生に関する意識等の質問紙を送付し、調査協力の同意を得て、自記式による回答を受けた。

若年者は少年と比べ、傷害・暴行、詐欺、覚せい剤取締法違反及び大麻取締法違反の構成比が相当程度に高くなっている。年齢が増すにつれ、罪名の多様化、分散化が見られる。

■ 出院後の問題行動等

少年院出院者（特別調査 1 対象者）で刑事処分を受けた者の出院から第 1 刑事処分までの問題行動を見ると、調査が可能であった 189 人のうち、不良交友の問題が見られた者が約 3 分の 2 と多数に上っている。その他、薬物使用等の問題、無為徒食（勤労意欲欠如を含む）、借金問題、ギャンブルたん溺の問題が多い。また、各種問題行動は重複して見られることが多く、複数の問題行動が認められる者が全体の約 75%に及んでいる。薬物使用が見られる者の 76.9%（30 人）、に、不良交友の問題が重複し、薬物使用の者の 30.8%に無為徒食が重複している（図 2-1、図 2-2）。



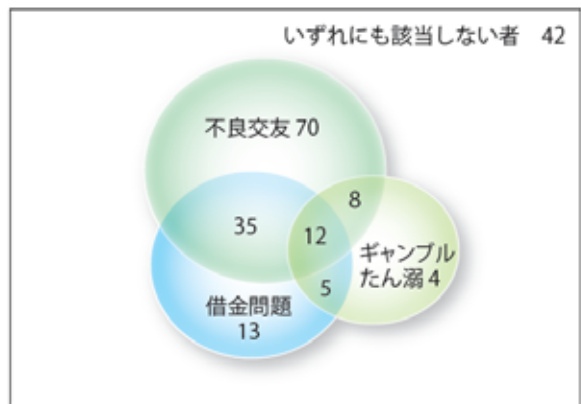
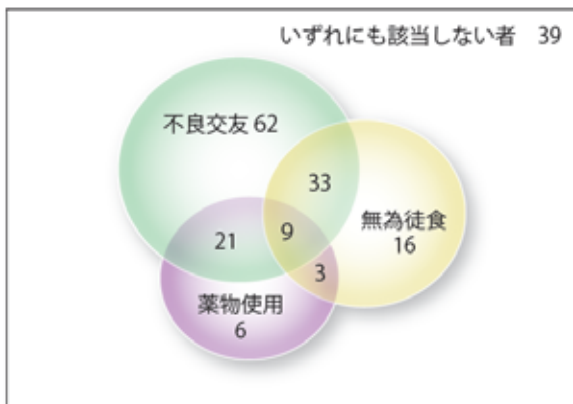
注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 問題行動等の有無について調査可能であった189人について、複数選択方式で調査したものである。
 3 罪名は、第1刑事処分に係る犯行による。
 4 「暴力団加入」は、暴力団との交遊を含む。
 5 「暴走族加入」は、暴走族との交遊を含む。
 6 「薬物使用」は、覚せい剤、大麻、麻薬等又はシンナーの使用をいう。
 7 「無為徒食」は、勤労意欲欠如を含む。

図 2-1 出院後の問題行動等（罪種別）【特別調査 1】

出典：平成 23 年版犯罪白書、法務省

①不良交友、無為徒食及び薬物使用の関係

②不良交友、ギャンブルたん溺及び借金問題の関係



注：「不良交友」は、暴力団・暴走族加入またはその他の素行不良者との交友をいう

図 2-2 問題行動等の重複状況

出典：平成 23 年版犯罪白書、法務省

イ 薬物乱用のはじまり

薬物関連問題は、思春期に端を発していることが少なくない。図 2-3 は、ダルク入所者の薬物乱用歴を調べたものである。まず、中学 1～2 年生で喫煙や飲酒を覚え、中学 3 年生前後で有機溶剤（いわゆるシンナー）と出会い、20 歳前後で大麻や覚醒剤を使い始め、20 代中頃には処方薬や市販薬といった医薬品の乱用が開始されている。このデータは、各薬物使用経験者の使用開始年齢の平均値であるため、この順序性が全員に当てはまるわけではない。しかし、薬物乱用の出発点が思春期にあることは明らかであり、このことから小中学生時期からの予防を重視する必要性が認められる。

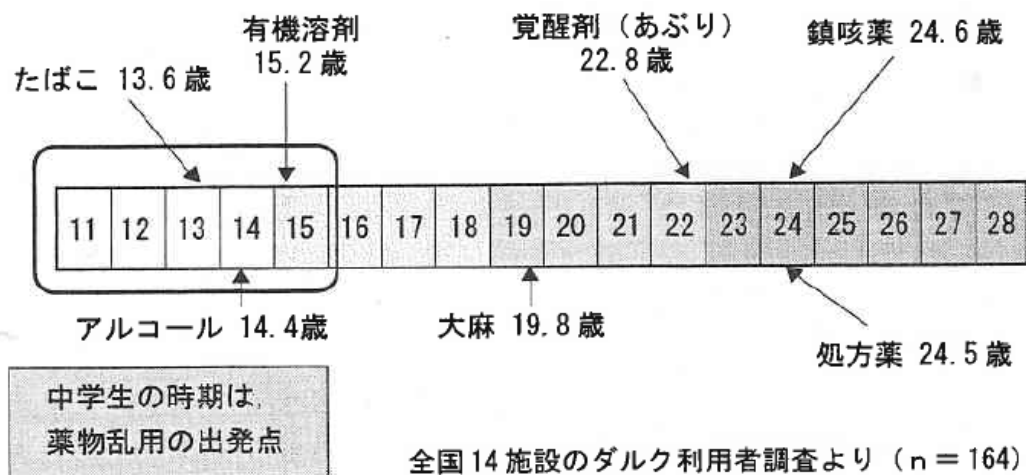


図 2-3 薬物依存症者の薬物乱用開始年齢

出典：青少年と薬物乱用・依存、保健医療科学、2005、嶋根卓也、三砂ちづる

薬物問題に関する家族の発見、相談時の本人年齢は図 2-4 のとおりである。発見のピークは 15～20 歳、相談のピークは 20～25 歳である。家族が薬物乱用に気づいてから最初に相談するまでに 3～5 年かかっている (図 2-4)。

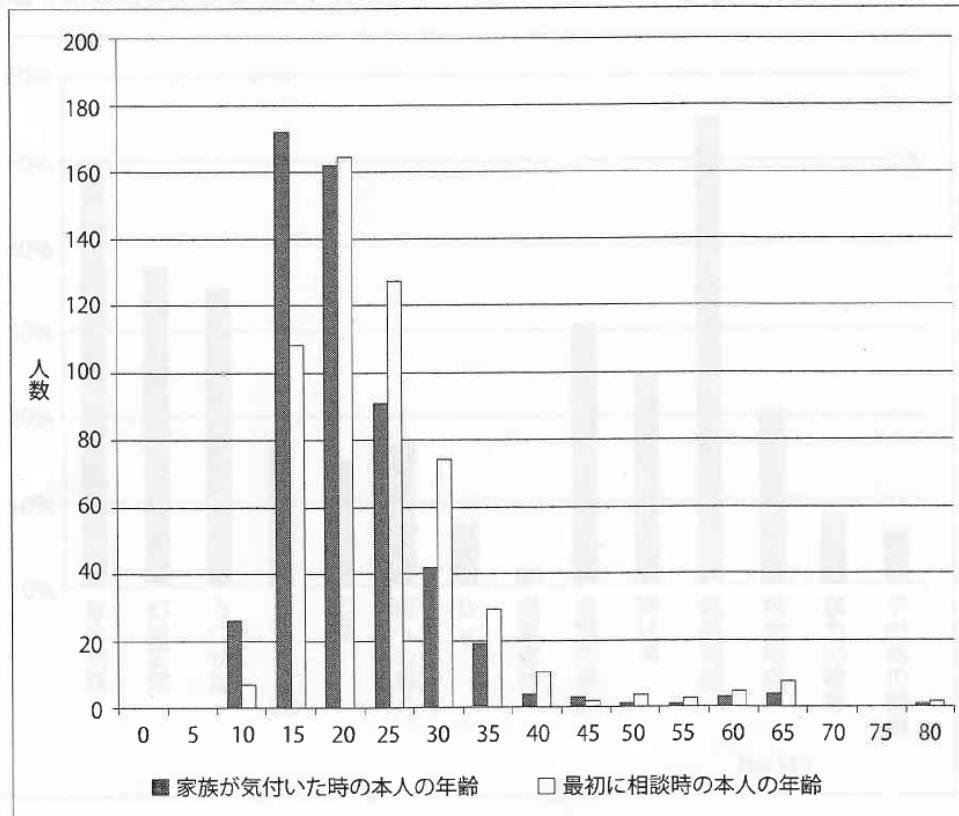


図 2-4 薬物問題に関する家族の発見・相談時の本人年齢

出典：薬物乱用・依存症者の家族の現状とその援助、思春期学 VOL. 28NO. 3 2010、森田展彰

ウ 薬物乱用のきっかけ

「全国精神科医療施設における実態調査 2010年」によれば、有機溶剤症例や大麻症例では、初回使用の動機として「誘われて」、「好奇心・興味」のように、身近な人間関係(とくに非行グループ)の影響を受けて始めるケースが多い(図 2-5)。

一方、睡眠剤・抗不安薬症例では、「不安の軽減」、「不眠の軽減」のように自らの症状を改善するために、自己判断で増量するなどの不適正な使用を繰り返すうちに薬物依存に至っていると推察される。思春期における薬物乱用を予防していくために注意しなければならないのは前者(身近な人間関係の影響)であろう。若年薬物乱用者の中には、自身の薬物体験を仲間に語り、場合によっては薬物を広めてしまう恐れもある。